

ベトナムにおける都市形成過程の特徴

—ハノイ，ホーチミン両都市の比較考察—

太田 晃 舜

目 次

はしがき

- I. ベトナムの政治史的展開
- II. ハノイにおける都市空間の形成
- III. ホーチミンにおける都市空間の形成
- IV. 結 語

は し が き

ベトナムには大古以来この地域に相次いで流入してきた諸種族の重層関係があり、また同様にその文化にもインドや中国の影響を多年にわたって強く受けてきた。さらに18世紀末のフランスによる植民地化がはじまるとともに、その文化も流れこんできた。

本論文では現在のベトナムの二大都市であるハノイとホーチミン（旧サイゴン）の都市形成過程を歴史地理的に考察し、ベトナムにおけるさまざまな起原の文化の重層性、複合性、錯雑性が都市形成のうえにどのような形態で現われているかを明らかにしようとしたものである。

ベトナムを含むインドシナ半島について筆者はすでに農業地理学、ないし政治地理学的な視点から一連の事例研究を報告してきた¹⁾。本論文ではこれらの研究をふまえながら、1985年8月の現地調査において収集した資料や都市地図²⁾、写真などを用い、かつ多くの先学の諸成果をも参照しながら、ホーチミン、ハノイ両都市の形成過程の特徴を考察した。

ベトナムは第二次世界大戦後の多年にわたる戦乱のため文献の保存が十分ではない。また印刷業も未発達の開発途上国であり、高温の気候条件や洪水災害の影響、さらに現在の社会主義体制の下における秘密主義的体質が加わって、利用できる資料は極めて限定されている。とくに統計資料は極端に少なく、かつ信憑性に疑問があったり、統計上の定義についても明確さを欠くものが多い。たとえば資料により数値の異なることが多く、その取扱いについてはことの外注意が必要である。

ベトナムの都市に関しても、基礎的資料の欠除や誇大表現的な数値がしばしばみられる。また、革命による地名の改称も多く、情報が混乱しやすい。社会主義体制のもとにあり、かつ戦乱終了直後の発展途上国という悪条件があって、ベトナムの都市は日本ではまだ十分に知られていない部分も多い。筆者が少ない資料にもかかわらず、この論文を発表する意義もここにある。

筆者は両都市のさまざまな時代の市街図をできる限り収集し、またベトナム語で書かれた両都市の概要を紹介した小冊子³⁾⁴⁾を参照して、最近の社会・経済の一面を知ることができた。現存する古い建造物、諸施設の立地位置、道路配置の形態なども考察にあたっての重要なヒントとなった。

ベトナムの歴史や地理についての記録には古くはベトナム人による文献⁵⁾があり、またヨーロッパ人による研究としては、H. Bernard⁶⁾、Mannel⁷⁾、Henry⁸⁾、Agard⁹⁾、Gourou¹⁰⁾、Ennis¹¹⁾、Robe-

quin¹²⁾, Dobby¹³⁾, F. Bernard¹⁴⁾, および日本では菊池一雅¹⁵⁾などがある。これらの研究は、インドシナ半島全域、またはデルタの水田地域の農業経済、村落や農民の生活、あるいはそれらの社会政策的な視点でまとめられたものが多い。都市地理学的な分析は比較的少ないが、サイゴン（現ホーチミン）の都市形成については、金坂清則¹⁶⁾がその概史をまとめている。

Ⅰ. ベトナムの政治史的展開

ベトナムの都市形成にはこの地域の政治体制の変革が大きくかかわっている。これは次の四つの時期に区分して考察するとわかりやすい。

第1期

17世紀中葉までの時代で、ベトナムが中国による支配とこれをはねのけようとするベトナム人との対立のなかで、ベトナム諸王朝が興亡をくり返した。中国の支配は紀元前の秦、漢時代にまでさか上ることができるが、7世紀に唐王朝は現在のハイノの地に安南都護府を置いていた¹⁷⁾。最初のベトナム人による王朝は939年、中国における五代の争乱時代に乗じて自立したゴークエン（呉権）によってなされた¹⁸⁾。1010年、リー（李）王朝が創建され、その初代王タイトー（太祖、李公蘊、在位1010～1025）は中国の宋王朝より交趾郡王に封ぜられて、現在のハノイの地に都した¹⁹⁾。1070年、李王朝はダイベト（大越）の国号を定め、後に続くチエン（陳）王朝（1225～1414）、後期レ（黎）王朝（1428～1788）もいずれもハノイを首都として、主に現在のベトナム北部に支配の中心を置いていた。

第2期

17世紀中葉から19世紀前半にかけての時代で、北部にレ王朝を建てたベト族が次第に南下して南東部のチャム族を駆逐し、南部のドンナイ（Dong Nai）川流域を含むメコンデルタに進出した。この17世紀中葉は中国では明、清両王朝の交代期にあたり、多数の中国人がベトナム南部地域に移住している。こ

のようにベトナム南部地域にもレ王朝の支配が及んだが、レ王朝は18世紀中葉に内紛を生じ、1802年にグエン（阮）王朝が全土を統一して、国号をベトナム（越南）と称した。グエン王朝は中部地方の出身で、フエ（順化）を首都とした。

第3期

19世紀後半から1945年までの時期で、フランスによる植民地支配の時代である。

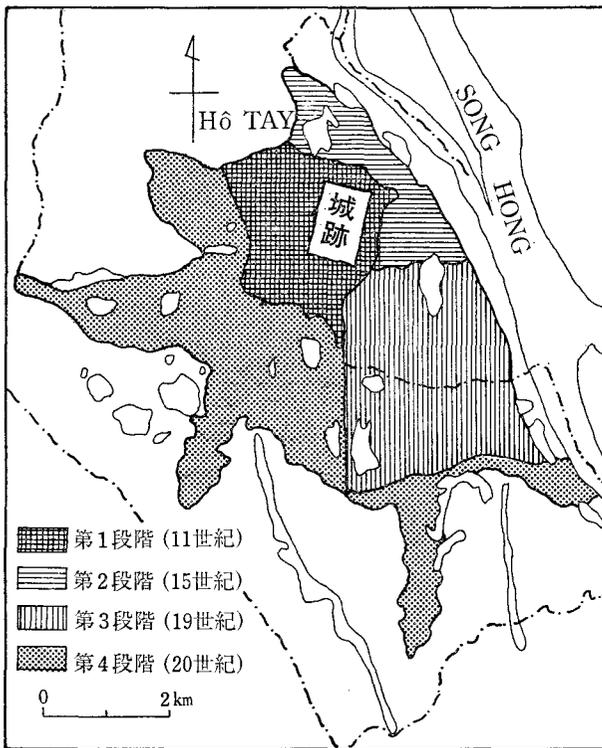
グエン王朝の創始者であったジャロン帝（嘉隆帝、阮福映、在位1802～20）はレ王朝末の内紛に乗じて自立したが、いったん敗れてシャムに亡命し、フランス人の援助を得てヴェトナムの統一に成功したものであった。1787年にジャロン帝とフランスのルイ16世との間に締結された条約では、フランス軍派兵の代償として、ベトナムはプロコンドル（Poule Condore）島、ツーラン（Tourane）港とその付属島嶼をフランスに譲渡し、フランス人のコーチシナにおける商業独占権を認めることを内容としていた²⁰⁾。

グエン王朝はジャロン帝の死後、キリスト教の伝道を禁止し、フランス人を迫害した。1858年、フランスは布教・通商の自由と殺害された宣教師に対する損害賠償を要求する目的で遠征軍を派遣し、メコンデルタの水路を通じてベトナム南部に侵入した。翌年にサイゴン（Saigon）を占領し、1862年、サイゴン条約を結んで、ジャディン、ビエンホワ、ベンチュアの諸州とプロコンドル島のフランスへの割譲が約されたが、ベトナム側は条約を履行しなかった。1867年、フランス軍は実力で上記の地域を占領し、植民地とした。

しかし、フランスはこれに満足せず、さらに北部への侵略をくり返した。そして、1883年にはベトナム全土をフランスの保護国とし、さらにラオス、カンボジアをも保護国化して、1887年にはフランス領インドシナ連邦を成立させた。1902年以降、フランスは総督府をハノイに置いて、インドシナ植民地の首都としたが、この状態は1945年まで続く。

第4期

第二次世界大戦の終了直後の1945年9月、ハノイに共産主義者を中核とするベトナム民主共和国が成立した。フランスはこの政権の北部地域における統治を承認したが、南部におけるフランス権益の温存をはかったので、ベトナム独立戦争がはじまった。しかし、フランス軍は敗れ、1954年のジュネーブ休戦協定によって、北緯17度線を境界とする南北両ベトナムの政権が相対する状態となった。1960年よりベトナム戦争がはじまり、1976年に北のベトナム民主共和国が南のベトナム共和国を合併する形態でベトナムの統一が完成した。この間、ハノイは一貫してベトナム民主共和国の首都であり、統一後もその地位に変化はなかったが、ベトナム共和国の首都で



第1図 ハノイ市街拡大概念図

NHA' XUAT BA'N NGOAI VAN HANOI PHÁT
HA'NH, 1983, BANDO TP. HANOI
The New Encyclopaedia Britannica, volume 8
1973~1974, The University of Chicago
現地調査などにより作成。

あったサイゴンは西欧的な文化を濃厚に残したまま
で推移し、統一後に急激な社会主義体制への転換を
経験することとなった。

II. ハノイにおける都市空間の形成

第1段階

ハノイは中国の唐王朝の安南都護府が置かれた地
であり、1010年、リー王朝の創建とともにこの地は
タンロン(昇竜)と称されて首都となった²¹⁾。リー
王朝の諸王は都城の建設と拡大を進め、中国式の城
郭都市の完成を目指して、王城、文廟(Van Mieu、
孔子廟、1070年)、一柱寺(Chua Mot Cot、1049
年)などが建造された。これらの立地した地区はタイ
湖(Hồ Tây、西湖)の東南岸に接し、現在のハ
ノイの最も古い市街地を形成する。これがハノイの都市形成の第1段階である。

第2段階

リー王朝の後を襲ったチャン王朝
(1225~1414年)、後期レ王朝(1428~
1788)もタンロンを都城として発展させ
た。都城周辺の農業の発達とともに堤防
網の築造が進み、農業経済の発展は商工
業の発達を促した。15世紀頃までに都城
の東方からソンコイ川畔に至る商工業地
区が形成され、職能別同業組合ごとの市
街が発達した。この地区には36個の同業
組合があったとされ、現在でも、絹街、
砂糖街、米穀街、紙業街、素麩街、大麻
街、綿花街、帆街、漬物(塩水)街、宝
石街、畳街、奉納紙街、医薬街、焼魚街
などを意味する街路名が残されている²²⁾。
道路密度は高いが、いずれも狭く曲りく
ねった不規則な形態を呈している。華僑
街もその一部に含まれる。この地区がハ
ノイの都市形成の第2段階をあらわして
いる。

第二次世界大戦後の社会主義体制建設

の過程で、この地区は国営商店、手工業の事業所、工業組合などに改組された。

この地区の北部にあるドンスワン市場 (Cho Đông Xuân) は1892年に創設されたもので、現在も賑っている。

19世紀のグエン王朝は中部のフエに都したが、タロンは依然としてベトナム北部の経済・文化の中心地としての地位を保った。ハノイ (河内) という地名はグエン王朝2代目のミンマン帝 (明命帝, 阮福峻, 1820~41) の時代に河川をめぐらした地という意味で命名されたものである²³⁾。

フランス人の支配下に入った直後のハノイ市街の道路は極めて狭く、中国式の舗装、すなわち、道路の中央のみ幅約1mだけ煉瓦舗装されていた。しかし、煉瓦の多くははがれたり、崩れたりしており、両側に排水路を欠いていたため、臭気臭をつく水溜りが各所にできていたという。その上、両側の露店から突き出された藁の庇のため、通行しうる部分は極めて狭いものとなっていた。そこを荷車や騎馬が通る時は通行人は避けるスペースすらなく、水溜りの泥の中に逃げこまねばならなかったという²⁴⁾。

第3段階

19世紀末以降、フランスによる植民地支配がはじまり、1902年、ハノイはフランス領インドシナ連邦の総督府が置かれた。商工街地区の南方には、フランス人による都市計画が施行され、旧市街とは対照的に熱帯街路樹をともなった幅広い道路、フランス風の建物、広い敷地をもつ高級住宅地がつくられた。この時期がハノイの都市形成の第3段階である。

かつての植民地時代の景観を最もよくのこしているこれらの建物は、現在は政府各省、党機関、各国大使館、迎賓館、ホテル、国立銀行、劇場、博物館などとして用いられ、政治・学術・文化施設の集中地区を形成する。この地区の北部を東南東-西北西方向に走るトランチ通り (Phô Trảng Thi) は現在のハノイの中心商店街を形成し、百貨店やブックセンターなどが立地している。

ハノイの人口は第二次世界大戦中の1943年には11万9,700人であったが、戦後の1948年には23万7,146人に達した²⁵⁾。

第4段階

ベトナム民主共和国の成立後、ハノイは共和国の首都となって人口が急増した。しかし1965年以降、アメリカ軍の爆撃で市街の多くが破壊され、1973年の北爆中止によって、ハノイはようやく復興の途についた。これによって、人口は再び増加した。これに伴う都市化は主として西南方に向かって展開された。この地区は低湿地と湖沼が多く、この地形的制約のため都市化が最も遅れていたが、現在は最も新しい市街を形成するに至っている。また、ハノイ市街の東北方に空港があるが、空港に通ずる道路の沿線には、工場、一般住宅、アパートなどが多く立地していて、ここにもハノイの郊外地区が形成されている。これらがハノイの都市形成の第4段階とみることができる。

このように、ハノイの都市形成をみると、タイ湖南岸近くに設けられた都城を中核として、次第に東方、東南方、西南方、西方と時計まわりの渦巻状に都市化が進んだことがわかる。これはソンコイ川西岸の自然堤防上の微高地には第1段階と第2段階の都市域が形成され、19世紀末の第3段階以降に至って後背湿地を含む低地に都市域の形成がみられたためである。フランス人による計画的な都市域も人工的に盛土したところが多くあった。

現在のハノイの中心部は官公署や文化施設の集中する第3段階の形成地の北部あたりと考えられる。

1976年までのハノイは、パディン (Ba Dinh)、ホアンキエム (Hoan Kiem)、ハイバ (Hai Ba)、ドンダ (Dong Da) の4行政区から構成され、その面積は597km²であった。上記4区は第3段階までに都市化された区域に相当する。1976年に都市化された郊外となった隣接のドンアン (Dong Anh)、ジャラム (Gia Lam)、ツリエム (Tu Liem)、タントリ (Thanh Tri) の4区が合併され、1979年に

はさらに外縁に位置する七つの行政区がハノイ市域に加えられた。その全面積は、2,133km²、人口2,543,800人（1980年頃の人口と推測する）であった²⁶⁾。

Ⅲ. ホーチミンにおける都市空間の形成

第1段階

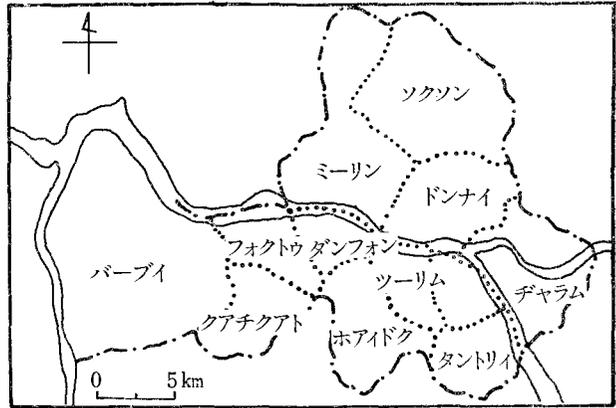
北部のレ王朝の勢力が南部のコーチンナに及んだのは17世紀中葉であったが、メコンデルタの開発が進むとともに、その商業中心地としてジャディン府（嘉定府）がつくられた。ジャディン府はドンナイ川の支流サイゴン川の右岸に位置し、ベンゲ川（Rach Bén Nghi）との合流点付近にあって、河川交通の要衝であった。当時は砦を中心とした小集落にすぎなかった²⁷⁾。

18世紀後半には中国の広東・福建地方よりの移民がこの地方に流入し、ジャディン府の西南方に華僑の町ショロン（Cholon）がつくられた（1778年）²⁸⁾。ジャディン府とショロンは相互に独立した集落であったが、運河で結ばれていた。

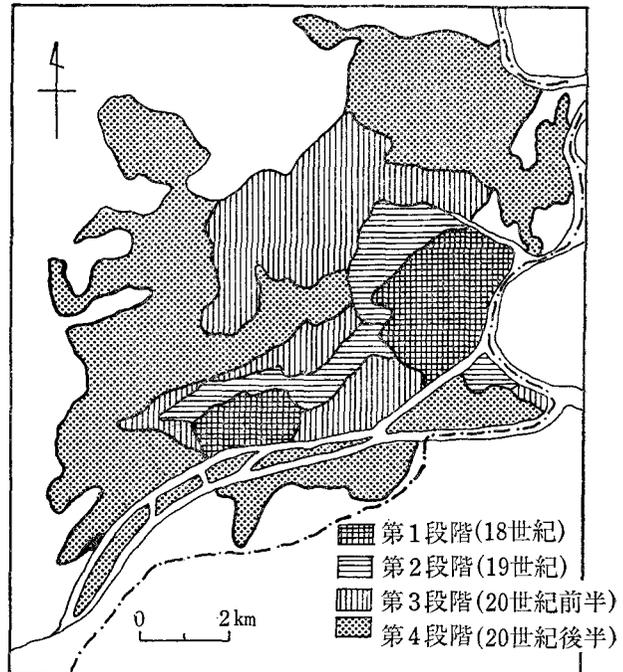
1789年、少数のフランス人部隊がのちにグエン王朝を創設するジャロン帝を支援するため渡来し、彼らによってジャディン府の改築が行なわれた。フランス人はジャディン府の砦を八角形の西欧式要塞とし、造船所も設けられた²⁹⁾。当時の市街はこの要塞と小規模な商業地区から成り、若干の掘割と広い沼沢地に囲まれていた。この時期が後年のサイゴンの都市形成の第1段階である。

現在の都心部で、市民劇場の北西方、教会や郵便局などの立地している地区が現在の砦の位置とされているが、その跡は現在は残されていない。

この地区は現在においても都心部を形成



第2図 ハノイ市郊外地域行政区分
出典：NHA' XUAT BAN NGOAI
VAN HANOI PHAT HANH,
1983, HANOI



第3図 ホーチミン市街拡大概念図
BAND TP HO CHI MINH 1985
Mây nét vẽ Thành phố' HO CHI MINH, 1985
金坂清則：サイゴン「世界の百万都市」p.186。
現地調査などにより作成。

し、市役所、郵便局、図書館、教会などの行政・公共・文化施設の集まる地区となっており、これとサイゴン川にはさまれる位置にはホテル、市民劇場、映画館などを含むダウンタウンがある。旧植民地都市の景観をのこしている地区である。

行政地区の南方には、ベトナム人商人や華僑が集中する商業地区がある。中央市場や旧サイゴン駅（現在は廃駅となり、北方のホアフン(Hoa Hung)が現在のサイゴン駅となっている）も含まれ、路上交通が最も混雑する地区である。

第2段階

ベトナムの植民地化を進めたフランスは、1867年以降、南部地方を占領し、サイゴンと呼ばれるようになったこの町は植民地経営の拠点となった。1902年まではここに総督府が置かれ、その港湾は貿易港として急速に発展した⁸⁰⁾。19世紀末からフランス人による都市計画が進められ、サイゴンの北方と西南方に向かって格子型の道路網がつけられて、サイゴンとショロンは景観的には連担して一つの都市を形成した。これが都市形成の第2段階である。

北方の新たに都市化された地区は、古い自然堤防上に発達した比較的高燥（標高約3～4m）の部分であり、高級住宅地となった。東南方にのびた地区はサイゴン港で、造船所を含む工業地区を形成した。港湾機能はサイゴンの重要な機能の一つで、川幅約300m、水深約10mに達し、航洋船の接岸が可能である。

第3段階

1884年頃のサイゴンの人口は1.3万人程度であったが、1936年には11.1万人に増加し、ショロンは1932年で14.5万の人口を擁していた⁸¹⁾。また、1932年にはサイゴンとショロンは行政的には合併して、サイゴンーショロン県となった。

第二次世界大戦頃からサイゴンーショロンの人口は急増し、大戦中の1943年に49.2万人、戦後の1948年には117.9万人に達した⁸²⁾。これに伴って都市域は北方のジャンディ地区にも伸び、当初は比較的

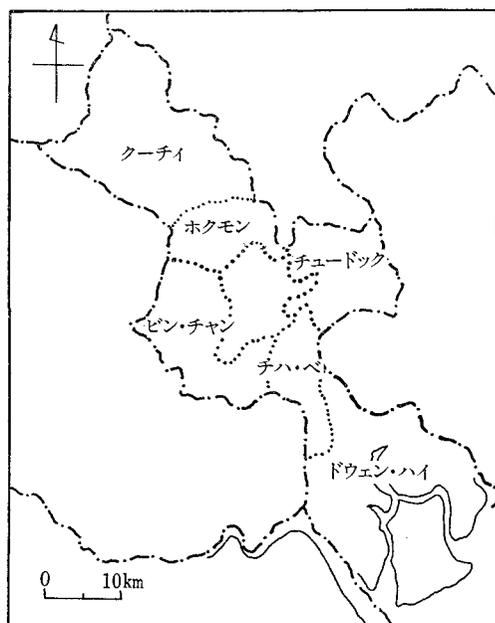
狭い帯状の地帯でサイゴンとショロンを結んでいた都市域はその幅を拡げている。ここには軽工業も発達した。これが都市形成の第3段階で、1960年頃までに都市化された地区である。

第4段階

1960年頃以降、地形的に微高地を形成する北部やその東北方のテュドック(Thú Đức)やビエンホア(Bien Hòa)に都市域が拡大し、ショロン西方や西北方への都市化も著しい。北方のタンソンニュット(Tân Sơn Nhất)空港を市域と結ぶ道沿いにも都市化がみられる。これが都市形成の第4段階である。

都市域の外縁部、とくに東北部にはバラックや水上家屋などの不良住宅が多く、スラムを形成していた。東方と南方、西方は標高1m内外で低湿地の部分が多く、都市化の遅い地区がみられる。

1954年のジュネーブ休戦協定からベトナム共和国が崩壊する1975年までサイゴンはベトナム共和国



第4図 ホーチミン市郊外地域行政区分
出典：NHA XUAT BAT THANH PHO
HO CHI MINH. 1985. BANDO TP.
HO CHI MINH.

(南ベトナム)の首都であった。この時期に植民地時代に命名された街路名称の多くはベトナム風に改められた。そして、同共和国の崩壊とともにサイゴンは北側の神格化された指導者の名にちなんでホーチミンと改称された。

このように、ホーチミンの都市形成をみると、サイゴンとショロンの二つの集落を中核として発達した複合都市であることがわかる。第2段階で二つの核が連担し、第3・第4段階で外方への同心円的な拡大がみられた。ハノイと比較してはやくからフランスの影響が現われたのも大きな特徴といえよう。

現在のホーチミンは市街部12区 139km²、郊外部6区 1,890km²より成る⁸⁹⁾。この市街部は第3段階までに都市化された区域に相当する。総人口は約350万(1985年)である。

IV. 結 語

ベトナムの二大都市であるハノイとホーチミンの都市形成過程を概観すると、そこには多くの共通点がみられる。同時にベトナムの北部と南部との間の歴史的発展過程や外国文化の影響の違いが都市形成過程の違いとなって現われている部分が多い。

ハノイとホーチミンは大河の河畔に発達した自然堤防上に都市発達の核が発生したという地形的な立地条件で共通している。そしてそのことは当時における交通の要衝としての機能を果たしたのであった。しかし、都市の発展によって自然堤防上の微高地のみでなく次第に低湿地にも都市化が及んで、最初の核を中心として、渦巻状あるいは同心円的に、都市域を外縁部に拡大した。

ベトナムの歴史に大きな影響を及ぼした外来の政治権力、およびそれとともに入ってきた文化には、中国とフランスのものがある。中国の影響は紀元前から及んでいたとも考えられるが、少なくとも都市形成の上で読みとれるのは7世紀の唐王朝以降であり、11世紀のリー王朝の成立によって、現在のハノイの地に中国式の城郭都市がつけられた。しかし、

中国文化の影響は長い間ベトナム北部にとどまり、南部への影響は大きなものではなかった。17世紀に至って、中国文化の影響を受けた北部のベト族が南部へ進出し、中国人の南部への移民によって、ベトナム南部でも中国文化の影響をもつ都市が発生するのであるが、現在のホーチミンの原形となるジャディン府やショロンの集落発生にみられるように、都市としての規模はまだ大きなものではなかったのである。

フランスの政治権力と文化がベトナムに及んでくるのは18世紀末からであるが、中国文化とは逆に南部から北部に向かう経路をとった。ジャディン府のような小規模な砦を中心とした小集落はフランス人進出の初期の段階でフランス式につくりかえられ、中国式の城郭は消滅してしまう。

フランスの植民地支配体制が確立し、それが南部から次第に北部に及ぶと、フランス人による都市計画が施行され、フランス風の都市景観が両都市に現われるようになる。これによって、不規則な狭い街路でつくられていた古い市街に代って、あるいはその外側に、広い直線型の道路が直交するグリッドパターンの新しい都市が建設されたのであった。

フランスの植民地時代に形成された地区は両都市において現在も行政・文化施設の集中するところとなっている。

このような欧米文化の影響は、第二次世界大戦後も約30年にわたって親西欧政権が成立していた南部では、アメリカによる諸施設や道路建設に現われ、また資本主義体制下での経済の活性化と同時に貧富の大きな格差の温存があって、これらが現在の都市景観の上にもよく現われている。

ベトナムの二大都市であるハノイとホーチミンはこのような歴史的発展過程のなかで、外来文化の異なる影響を受け、多くの共通性とともに、相異なる都市形態・都市景観を保っているといえよう。

〔付 記〕

本稿作成にあたり、日本大学文理学部地理学教室の諸先生方に絶えず御指導をいただき、また早稲田大学の菊池一雅教授からもベトナムに関する資料閲覧に便宜をはかっていただいた。ベトナム語の文献を訳して下さった小池ゆかり氏の御助力も大きい。アジア経済研究所、総理府総務庁アジア太平洋統計研修所、国会図書館地図室の担当職員の方々、国士館大学地理学教室の諸先生方、現地調査にあたって協力をいただいた通訳の方々とともに、ここに記して厚く御礼申し上げる。 (国士館大学)

参考文献

- 1) 太田晃舜：「第2次世界大戦後における北ベトナムの交通復興とその意義」新地理13—2, 1965, pp. 80~87.
———：「南ベトナムにおける農地改革の政治地理的考察」新地理14—1, 1966, pp. 23~32.
———：「ベトナムの稲作に関する一考察」人文地理19—3, 1967, pp. 306~315.
———：「メコンデルタにおける道路・水路の一特色」地理学評論41—3, 1968, pp. 196~200.
———：「北ベトナムにおける農地改革後の稲作生産に関する一考察」新地理16—2, 1968, pp. 35~43.
———：「トンキンデルタにおける道路・水路の一特色」新地理17—4, 1970, pp. 38~49.
———：「インドシナ辺境における民族と国家形成の歴史地理的一考察」歴史地理学紀要13, 1971, pp. 223~256.
———：「インドシナにおける国境の性格に関する一考察」新地理26—1, 1978, pp. 29~39.
- 2) *Bản đồ thành Phố Hồ Chí Minh*. 1 : 23000 NHA XUAT BAN THANH PHO HO CHI MINH, 1985.
thành Phố Hồ Chí Minh. 1 : 20000. NHA XUAT BAN NGOAIVAN HANOI, 1982.
Hanoi, NHA XUAT BAN NGOAI VAN HANOI, Phát hành, 1983.
Bản đồ Dulichthi Dôhânôi, 1 : 12500, NXB HANOI XUATBAN NAM, 1984.
Hanoi Street Map. 1 : 30000, Printed in

- the Socialist Republic of Vietnam, 1984.
- 3) *Máy nét ve Thành Phố Hồ Chí Minh*, NHA XUAT BAN THAHN PHO HO CHI MINH, 1985.
- 4) *Hanoi, A Guide Book*, printed in the Socialist Republic of Vietnam, 1984.
- 5) *Le Tac : An-Nam chi luoc*. 1285. Le Quang Dinh : Nhat-Thongdudia Chi. 1806.
宮廷の出来事や皇帝の行動などの記述を主とし、地誌としての重要性は低いとされている——菊池一雅：『ベトナムの農民』古今書院, 1966, p. 4.
- 6) Bernard, H. : *Pour la compréhension de l'Indochine et de l'occident*. Hanoi, 1939.
- 7) Mannel de Rivoc : *Del imperio de Annam de Tunquiny Cochinchina*. Manila, 1858.
- 8) Henry, Yves : *Economic agricole de l'Indochine*. Hanoi, 1932.
- 9) Agard, Adolphe : *L'Union indochinoise francaise ou Indochine*. Hanoi, 1935.
- 10) Gourou, Pierre : *Les paysans du delta tonkinois. études de géographie humaine*. Paris, 1936.
- 11) Ennis, E. Thomas : *French Policy and Developments in Indochina*. Chicago, 1936.
- 12) Robequain, Charles : *L'Evolution économique de l'Indochine francaise*. Paris, 1939.
- 13) Dobby, E. H. G. : *Southeast Asia*. (7th ed.), London, 1960.
- 14) Bernard, Fall : *The Two Vietnams, A Political and Military Analysis*. (2nd. revised), London, 1967.
- 15) 菊池一雅：『ベトナムの農民』古今書院, 1966.
- 16) 金坂清則：「サイゴン」『世界の百万都市』（藤岡謙二郎・谷岡武雄編）。朝倉書店, 1970, pp. 184~189.
- 17) Masson, André (杉辺利英・根本長兵衛共訳) : 『ヴェトナム史』白水社, 1969. p. 24.
- 18) Le Thành Khôi (石沢良昭訳) : 『東南アジア史』。白水社, 1970. p. 62.
- 19) 日本ベトナム友好協会 (編・刊) : 『新ベトナム小史』 1970, p. 6.
- 20) 太平洋協会 (編) : 『仏領印度支那 (政治・経済)』, 河出書房, 1940, p. 19.
- 21) 前掲 4) p. 9.
- 22) 前掲 4) p. 14.

- 23) 『世界地名大事典』(7—アジア・アフリカII)
朝倉書店, 1974, p. 993. [「ハノイ」<菊池一雅>]
- 24) 楊廣咸: 『安南史』 東亜研究所, 1942. p. 103.
- 25) The Columbia Lippincott Gazetteer of the
World. Columbia Univ. Press, J. B. Lippincott,
New York, 1952, p. 755.
- 26) 前掲 4) p. 13.
- 27) 前掲 3) p. 10.
- 28) 前掲 16) p. 185.
- 29) 前掲 24) p. 82.
- 30) McGee, T. G.: *The Southeast Asian City*.
G. Bell & Sons, London, 1967, p. 53.
- 31) 前掲 25) p. 1625.
- 32) 前掲 25) p. 1625.
- 33) 前掲 3) p. 5.

Characteristics of the Formation of Urban Space in Vietnam
—A Comparative Study in Hanoi and Ho Chi Minh—
Kohshun OHTA

Many kind of political and economic powers had intricated in the history of Vietnam located in the eastern part of Indo-China Peninsula. Especially Vietnam was divided into the North and the South after World War II. The independence of new nation had to wait until 1976.

The aim of this paper is to show the influence of these intricated situation on the structure of urban space through a comparison of major cities in the North and the South. The socio-economic characteristics and urban types are mainly discussed. This paper is based on the field survey held in August, 1985.

The city of Hanoi is composed of four areas, namely, the central part constructed through the age of Chinese-style citadel, the area originated with commerce and manufacture in Guild age, the area developed under the colonial policy of France and the newly developed area after the independence. The shape of urbanized area is a semicircular with one core. Today's central area is located near the lake HOAN KIEM and the southeastern part of this lake. The urbanization has spread into the southern and south western lowland with the growth of population. The roads in early developed area is radial pattern and narrow. On the other hand, roads constructed under the colonial government are grid pattern. The difference or unbalance is seen also in the type of building.

The city of Ho Chi Minh (formerly, Saigon) consists of three areas, the first one is the area developed by the Chinese immigrated mainly from Kwangtung and Fukien since 1778, the second one is the fortified area constructed in Guen Dynasty in 1790s and the third one is Saigon area constructed by French since the conquest in 1859. Cholon is the most densely populated area, where Chinese peoples are dominant in this area. The function of this area is a commercial center and the important point of transportation. Recently, the industrialization has been proceeded in the area of south-west.

Formerly, the fortified area in Saigon is the center of the national government and the administration. CBD where wide roads in grid pattern and buildings were constructed under the city planning of the colonial government is formed between the fortified area and Saigon River. Hotels, citizen's theater, movie theaters are located also in this area. An appearance of the colonial city seems to be felt through the urban landscape and atmos-

phere. Other part of this city is characterized as follows, another commercial center in the south, the high grade residential area in the north and industries and businesses in the east. The urban structure of Saigon is a concentric circle style. Cholon and Saigon were founded separately with different kind of functions, however, these two areas have been tied through the growth of these cities and became a core area of greater Saigon, especially after the independance. Recent urbanization and industrialization are seen in the north-east and the north-west, because southern and western sections are occupied by the marsh.

The difference of urban structure in Vietnam is based on the factor of races and the degree of the penetration of political power. The transitional feature of peninsula is observed also in Vietnam.